

# ザ・センチネル 陰謀の星条旗

2006(平成18)年7月19日鑑賞(東宝試写室)

★★★★



監督＝クラーク・ジョンソン／原作＝ジェラルド・ペティヴィッチ／製作・出演＝マイケル・ダグラス／出演＝キーファー・サザーランド／エヴァ・ロンゴリア／キム・ペイシングー／デヴィッド・ラッシュ／クラーク・ジョンソン／レイナー・シャイン (20世紀フォックス映画配給／2006年アメリカ映画／108分)

……マイケル・ダグラスにまたひとつサスペンス・スリラーの代表作が誕生した。ファースト・レディ (大統領夫人) と、それを警護するシークレット・サービスの責任者との不倫という設定は、ありえないことだからこそ、もしそれが本当なら……？ 他方、大統領暗殺の陰謀を企む暗殺団の正体は？ そしてそれとツルむ内部の裏切り者は……？ 裏切り者！ はめられた！ 大統領が危ない！ という二転三転のスリルとサスペンスに富んだ展開に、あなたもきっと満足できるはず。しかし、私には1つだけ不満な点も……。

## よくわかるシークレット・サービスの実態……

この映画は製作のマイケル・ダグラスが、まだジェラルド・ペティヴィッチの小説が出版される前から映画化権を獲得したほど、思い入れの高かった作品とのこと。141年間の歴史を誇るシークレット・サービス (SS) は、皆無と言っているほどスキャンダルがなかった組織。

ところが、元財務省秘密検察局 (シークレット・サービス) のエージェントとして、ヨーロッパや中東で勤務した経験を持つ原作者のジェラルド・ペティヴィッチは、そのシークレット・サービス内に「あるスキャンダル」をデッチあげた(?) うえ、何とも大胆なことに「大統領暗殺計画」まで構想(?) してしまった。小説の世界だからいいようなものの、彼が現職中にこんな「空想」を抱き、

実行に移そうとしていたら大変……。

しかし、小説と同様映画も便利なもので、そんな「空想」をいくらでもスクリーン上に表現することができる。

そんなチョー面白いシークレット・サービス内のスキャンダルと大統領暗殺の陰謀を、生々しくかつスリリングにスクリーン上で描くためには、シークレット・サービスの実態をしっかりと観客に見せることが必要。さて、その点は大丈夫かな……？ 「ここはヒミツ」などとし惜しみしていないかな……？ そんな心配はご無用。この映画を観れば、シークレット・サービスの全貌が日本国民の目にも明らかに……。

## 「あるスキャンダル」とは？

原作者のジェラルド・ペティヴィッチがデッチあげた「あるスキャンダル」とは、ファースト・レディ＝大統領夫人、サラ・バラントイン（キム・ベイシングー）の不倫というとんでもないもの。そして、そのお相手が、かつてレーガン大統領を暗殺者の手から守ったシークレット・サービスのベテラン・エージェントで、今はファースト・レディの護衛の責任者となっているピート・ギャリソン（マイケル・ダグラス）。

映画の冒頭から緊迫感をもって描かれる秒刻み、分刻みでの、シークレット・サービスによる大統領と大統領夫人の護衛ぶりを見れば、大統領夫人とピートが誰にも見られずに、ベッドをともにするような時間や空間を持つことは到底不可能に思えるが、それをやり遂げるのがフィクションの小説であり、「何でもあり」の映画。

もちろん、スクリーン上でもそんな秘めゴトを描くシーンはほんの一瞬だけだが、こりゃバレたらホントにえらいスキャンダル……。

## 暗殺されたアメリカ大統領は？ また日本では？

「暗殺されたアメリカ大統領は過去何人？」との質問に対して、正解を書ける日本人はあまりいないだろう。しかし、私たち団塊の世代であれば、多分2人は書けるはず。それはエイブラハム・リンカーン（第16代）とジョン・F・ケネディ

ィ（第35代）の2人。しかし、実はこの2人以外にもジェームズ・アブラム・ガーフィールド（第20代）とウィリアム・マッキンリー（第25代）の2人がいるうえ、1981年にはレーガン大統領（第40代）の暗殺未遂事件も。このように自由と民主主義に最大の価値を置くアメリカにおいては、その反面として、暗殺の危険と背中合わせというわけだ。

これに対して、日本で暗殺された総理大臣は、戦前には原敬（第19代）と犬養毅（第29代）がいたが、戦後はゼロ。もっとも、アメリカ流に民主主義化した戦後の日本においても、1960年の浅沼稻次郎社会党委員長の暗殺という物騒な事件もあったが、その後高度経済成長と平和を謳歌する日本は「世界一治安のいい国」を誇れるようになった。しかし今は……？

## エリート・エージェント同士の確執の元は……？

ある日、ピートの親しい同僚だったシークレット・サービスのエージェントであるチャーリー・メリウェザー（クラーク・ジョンソン）が自宅の前で射殺されるという事件が発生。その捜査の責任者になったのは、ピートのかつての部下で、ピートが信頼するデヴィッド・ブレキンリッジ（キーファー・サザーランド）。そしてデヴィッドの元に配属された新米の女性エージェントがジル・マリン（エヴァ・ロンゴリア）。

ジルは、ピートから信頼できる上司はデヴィッドだと言われていたため、デヴィッドの元への配属を希望したのだった。ところが、あいさつもそこそこに、早速ジルを連れて捜査を開始したデヴィッドは、ピートと鉢合わせすると、なぜか挑発的な態度を……。

それは、デヴィッドの離婚原因がデヴィッドの妻とピートとの情事にあると、デヴィッドが信じ込んでいたため。ピートは頑強にそれを否認しているのだから、きちんと調べればいいのにと私などは思ってしまうが、それは話の本筋ではなく、ピートとデヴィッドが仲違いしている原因として原作者のジェラルド・ペティヴィッチがデッチあげた（？）ストーリーだから、素直に認めておこう。しかし、エリート・エージェントでも、そんなことで仲違いするとは、やはり同じ人間……？

## タレ込み屋はいつも重要な情報源……

スパイものやサスペンス映画には、よくタレ込み屋が登場する。それは事件の解決に向けたちょっとしたヒントを与えつつ、その背後にある巨悪を示唆するのに便利だから……？　そしてまた現実にも、こういう「人種」がたくさん存在していることもたしか……。

この映画ではそれがピートに接触をしてきたウォルター・ゼイビアー（レイナー・シャイン）という男。情報を漏らせば必ず殺されるとアピールしながら、100万ドルという法外な情報料を要求するほどだから、かなり精度の高いものかもしれないが、その情報は「大統領暗殺の陰謀にシークレット・サービスの高官が関係している」というもの。

これはつまり、141年間続いてきた国家と大統領に対して忠誠を尽くすという伝統が崩壊することを意味する重大な情報。「そんなバカな」といったんはその情報を否定したピートだったが……？

## 「はめられたんだ！」という弁解は……？

マイケル・ダグラスが出演するサスペンス・スリラーものには、『ゲーム』（97年）、『ダイヤル M』（98年）、『トラフィック』（00年）、『サウンド・オブ・サイレンス』（01年）等があり、またそれに不倫が大きく絡むものに、『危険な情事』（87年）、『氷の微笑』（92年）等があるが、これらはいずれもすばらしい出来の映画ばかり。これらの映画でも、よくマイケル・ダグラスは「はめられている」が、そのパターンは今回も同じ……。したがって、前半の興味の対象は、巧妙に仕掛けられたワナによる「大統領暗殺の陰謀」へのマイケル・ダグラス扮するピートのはめられ方……？

デヴィッドが指揮する捜査班の包囲網の中、窮地に追い込まれたピートは、遂に同僚のエージェントとジルの銃を奪って逃走するといつてもない事態に……。全員かけられたはずの「ウソ発見器」でも、唯1人ピートだけがクロと出たうえ、同僚を殴って逃走したのでは、「私が大統領暗殺の陰謀の犯人です」と自白しているようなもの。これではいくら「俺ははめられたんだ！」と弁解して

も通用しないのでは……？ しかし、なぜピートはそんな行動を……？ 果たして、ピートには真犯人追及・逮捕のメドがたっているのだろうか……？

## まだまだ使える KGB……？

かつての米ソ冷戦時代。アメリカの CIA や FBI に対抗できるほど有名だったのが、旧ソ連の KGB（国家保安委員会）。1991年にこの KGB は組織が分けられて解散したが、秘密警察として何となく「暗いイメージ」が残っているためか、何か悪いことを企む人間にはよく KGB が使われる。

この映画でもそれは同じで、大統領暗殺の陰謀を進める暗殺団は元 KGB の人間たち。組織は解散しても、その中の人間はなお残っているため、まだまだ KGB は使えるというわけだが……？

## IT 機器の使いこなしも見せ場の1つ……

シークレット・サービスは個人としての技能も大切だが、それ以上に組織として動くことが大切。そのために必要なのは、上下の指揮命令系統と同列のスタッフたちの意思疎通。映画の冒頭に描かれる大統領の警備ぶりを見ていて感心させられるのは、その情報伝達能力。

そして、この映画後半の見せ場の1つが、デヴィッド率いる追跡チームから逃れつつ、なお自分1人の力で大統領暗殺の陰謀を企む暗殺団を追及していく、ピートの IT 機器の使いこなし能力の冴え。パソコンを自由自在に操れることは当然として、電話をかけることを見越してそれを途中で盗聴したり、死亡した暗殺団の1人にコップを持たせてとった指紋の分析結果を素早くメールで送ったり、その能力はすごいもの。

マイケル・ダグラス扮するピートはベテラン・エージェントだから、年齢は50歳前後のはず。しかし、おっさんだって、やればここまでできるわけだ……。

## G8、今年はロシアだが、あの時は……？

G8（主要国首脳会議）は、つい先日ロシアを議長国として開催され、7月16日には北朝鮮のミサイル発射などに関する「不拡散に関する声明」などを出した

ところ。しかし、7月5日の北朝鮮による長距離弾道ミサイル7発の発射を受けて展開された、国連安全保障理事会での北朝鮮非難決議の成否と7月15日（日本時間7月16日午前）の決議採択の方に日本人の注目が集まったため、G8の注目度は今ひとつ……？

しかし、この映画の中で開かれるG8は、カナダのトロントが会場。一度は大統領ヘリを撃墜しながら、大統領の暗殺に失敗した暗殺団が、再度狙ったのがこのG8の舞台。その証拠を遂に突き止めたピートは、現場に急いだ。そして、別ルートから同じ目標に向かったデヴィッドも急いでこの会場へ。そして、今バランタイン大統領はG8の舞台で演説中。

もちろん、それを警備するシークレット・サービスはきちんと手配されているが、ピートに罪をなすりつけた裏切り者は、その警備の配置の中に……？ さて、大統領と大統領夫人の命運は……？

## なぜピートを逃がすの？

この映画のスリルとサスペンスは一流で、十分楽しめるものだが、ただ1点だけ不満な点を指摘しておこう。それはチャーリー殺しの調査から大統領暗殺の陰謀に加担するシークレット・サービス員あぶり出しの責任者となったデヴィッドが見せる、決定的な場面における決断の甘さ……。かつてピートの部下だったデヴィッドは、誰よりもピートの優秀さを知っているから、逃走したピートを逮捕、場合によれば銃撃戦で撃ち倒すについて、「一瞬たりとも逡巡するな」と部下たちに厳命した。

ジルにしてもその他のエージェントにしても、ピートは尊敬すべき先輩だから、それを徹底しておかなければ「つい人情に流されて」という不測の事態になりかねないから、その命令は当然のこと。ところが、その当の本人が肝心なところで……？ そりゃないだろう、と私は思うのだが……。

2006(平成18)年7月20日記